

WEB版

# 耐久高校図書館だより

11月は文化の日を中心に、読書週間が設けられています。

今年の標語は「本に恋する季節です！」でした。皆さんには大好きな本、お気に入りの本はありますか？あるいは、続きが気になって気になって仕方がなくて、一刻も早く家に帰ってその本を手に取りたい！とそわそわしたことがありますか？もしそんな本に出合えていたらとても幸せです。

毎日、大量の本を扱う司書ですが、これぞお気に入り！という本はなかなか出合うことはありません。

長い人生を生きてきましたが、「この本に恋しています！」と断言できるほどの本は両手で数えられるほどしかありません。でも、その本の手触りや、重さや、もちろん中身も、すべて気に入っていて、目をつぶって触るだけでその本を当ててみよ、と言われても、きっと当てられると思うのです。文庫本であったとしても、その本にしかない厚み、自分の本として大事に読んできたカバーのめくれ具合なんかが指先に染みついている、もはや恋ではなく、愛なのではと思うばかりです。

皆さんもこれからの人生をキラキラしたものにしてくれる、恋するように手に取れる本に出会えることを願っています。

## 校内読書旬間 11/6～11/17

### 図書館クイズ

毎年図書館内にクイズを貼り出します。これなら知っているだろう、と問題を作成しているのですが、なかなか解けないものもあり、匙加減が難しいところです。今年大勢の生徒が苦戦していたのは、ブリュッゲルが描いた絵の題材で、「〇〇の塔」の〇〇を当てるものでした。大阪で展覧会が開催されたこともあり、新聞やテレビでコマーシャルを何回



もしていたので、大丈夫と思いましたが、意外にもヒントは「バ〇ルやで！」とほとんど答えのよ  
うなヒントを出しても出てこず、苦戦していました。

## 全校一斉読書会



今年も恒例の校内読書旬間が催されました。多くの企画が  
あり、ロングホームルームでは昨年に引き続きビブリオバトル  
をクラスで行いました。図書委員が進行し、クラス全員が  
本を1冊紹介して、一番読みたくなった本を選ぶバトル、  
今年も多彩な本が各教室で紹介されていました。

やはり一番人数が多かったのが住野よる氏の『君の隣臓を食  
べたい』で、どのクラスでも一人は必ず紹介していました。今  
年の夏には映画も公開され、見た人誰に聞いても、「良かった  
よ〜」「泣きそうになったわ〜」と言っていたので、映画か  
ら本に入った人も多かったようです。

## 教養講座



芸術科美術の大久保先生に講師になっていただき、「陶芸ってど  
んなもの？」と題した講演を行いました。まず大久保先生の人生  
における陶芸の始まりから今に至るまで、大久保ヒストリーを伺  
いました。そして、陶芸の始まり、縄文土器や弥生土器、釉薬  
の発見、中世六古窯についてなど、焼く時の温度やその時代の  
特徴などから、現代に続く流れ  
を説明してくださいました。現代

美術では器としての作品を作る陶芸家も、オブジ  
ェを作成する陶芸家も紹介され、アート作品としてはいろい  
ろな形があることを教えていただきました。最後に大久保先生自  
身の作品を見せていただき、陶芸ってこんな面白いものなのだ、  
と改めて実感しました。



これが全部陶器なんですよ！！

軍手なんて触ったらクニャって

なりそうですよね！！

# クイズ「この小説は？」

校内読書旬間中の5日間、昼休みに放送する「クイズこの小説は？」ですが、毎回楽しみにしてくれる人もおり、楽しんでやっています。今年の問題となった作品を紹介します。



## 1日目「はなのみち」岡信子

皆さんが小学1年生の時に教科書に載っていたおはなしです。何回も何回も音読したのではないのでしょうか。冬に向かうこの季節にぴったりの、春が来た時の情景が浮かび上がる名作です。ものすごく短いお話だったので、全部読んでもらいました。

## 2日目「やまなし」宮沢賢治

これもまた小学校の教科書に載っている、不思議な童話です。クラムボンはいったい何なのか、という話になります。宮沢賢治が作り出す、水の底の静かな、そしてたゆたう光に満ちた、そぐでいて生命の暗部にも迫る世界に浸れる作品です。



## 3日目「山月記」中島敦

高校生の定番、国語教科書には必ず掲載される、中島敦の名作です。「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」というフレーズには、誰もがハッとさせられたことと思います。人が虎になってしまうほど何かに執着するとは、どういったことか、李徴にあって他の詩人にはないものは何だったのか、一回読んだだけでも何かを感じ取ることができる作品です。



## 4日目「吾輩は猫である」夏目漱石

あまりにも有名な書き出しのため、この日は正解者が続出だったのではないのでしょうか。漱石の文学は落語の影響を受けている、とよく言われますが、この作品もテンポよく、猫の1人語りでどんどん進んでいきます。書き出しだけではなく、全編通して読んでみてください。



## 5日目「沈黙」遠藤周作

昨年、スコセッシ氏の監督として映画化され、話題をよびました。信仰ということについて、生きていくことについて、貧困や異文化の衝突について、様々なテーマを盛り込んだ、人間の本質に迫る大作です。遠藤周作は人間が生きる意味を深く問い直す作品が多く、どれも我が身を振り返り自分が生きてきた道を、若いときであればこれからどう生きていくべきかを考えさせられます。『沈黙』はその中でも心に強く訴えかける作品です。

